

# 学生の学びと成長を止めない ニューノーマル時代の学生支援



関西大学教育推進部教授  
山田剛史

1977年大阪生まれ。神戸大学博士(学術)。専門は、教育開発と人材育成。島根大学教育開発センター講師・准教授、愛媛大学教育企画室准教授、京都大学高等教育研究開発推進センター准教授を経て、2020年10月より現職。

本稿では、コロナ禍でも学生の学びと成長を止めないための新しい学生支援のあり方について検討を行う。今回のコロナ禍で大学が検討すべき領域は、正課教育(遠隔授業)と準正課・課外活動(学生支援)に大別される。遠隔授業のあり方については既に多くの議論があり、今回のテーマの中心ではないが、学生支援の問題を考えるうえでも関連性があり、一定の整理が必要と考える。具体的には、まず、遠隔授業の一斉導入とそこで生じた課題について取り上げる。次に、学生の学びと成長において大学という空間、大学生活という時間の持つ意義について述べる。そして、遠隔授業で生じた課題解決と大学の意義とを繋ぐ重要な概念として、学生エンゲージメントを紹介する。最後に、それらを具体化するためのニューノーマル時代の学生支援のあり方について提案する。

## 未曾有の状況下での遠隔授業への挑戦

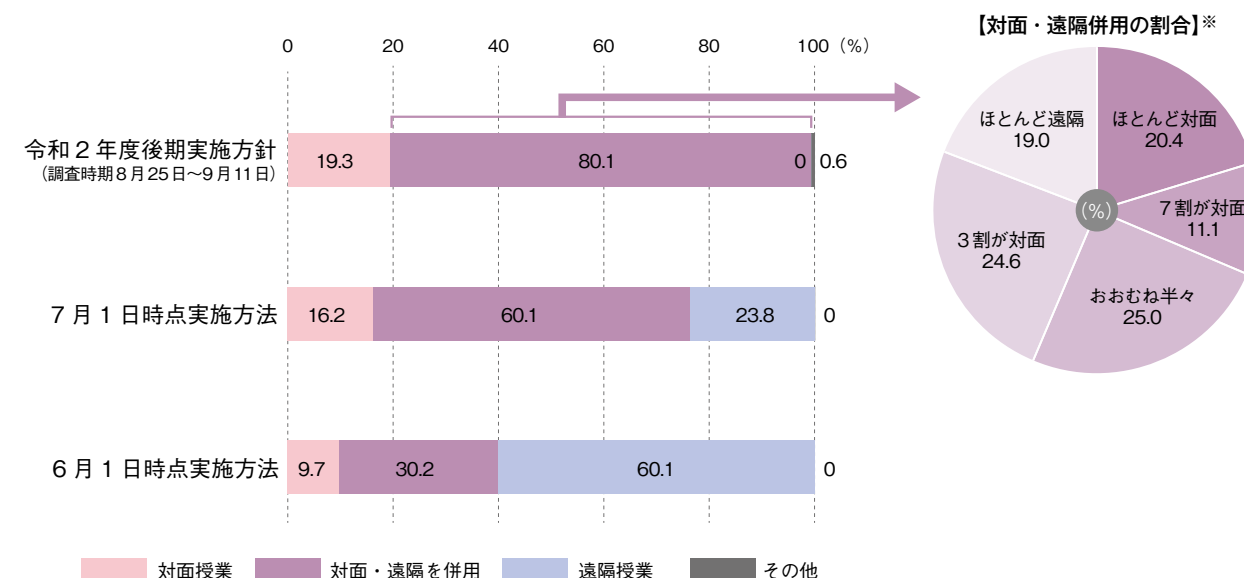
2020年に入り、新型コロナウイルス(COVID-19)の国内発生及び感染拡大を受け、多くの大学では前期は遠隔授業を中心に、後期は遠隔授業と対面授業を併用する形で教育活動が展開されている(文部科学省、図)。十分な準備期間を取ることができない緊急対応型遠隔授業

(Emergency Remote Teaching)として、遠隔授業(大きくは、LMSを活用した教材提示型、授業動画(映像・音声)を撮影し共有するオンデマンド型、ビデオ会議システムを活用した同時双方向型の3タイプ)が選択・導入された。多くの大学では学生調査も実施され、遠隔授業に対する一定の肯定的なフィードバックを得た。例えば、オンデマンド型授業の「場所・時間を問わず、自分のペースで学べる、予習・復習がしやすい」といった利点は、とりわけ知識習得を目的とした知識伝達型の授業と相性が良く、今後の活用も期待できる。

## 遠隔授業の成功と解決すべき課題

学生の学びを止めないための遠隔授業への挑戦は一定の功を奏したと言える。他方で、学生から見たときの学びの継続性に関わる重要な課題も見えてきた。一つは学習意欲の維持、今一つはメンタルヘルスの不調である。学習意欲の維持については、学ぶ場所や(教材提示型やオンデマンド型の場合は)学ぶ時間が学生個人に委ねられるため、対面時以上に学習への強い動機づけや自己調整学習力がないと継続することが難しい。各種学生調査において、「集中力が続かない」「学習のペースがつかみにくい」といった学習の継続性に関する困難を挙

新型コロナウイルス感染症の状況を踏まえた大学等の授業方針・方法(文部科学省調べ、筆者作成)



げる学生も多く、コツコツ勉強する習慣があり何とかいける学生とそうでない学生の二極化が強まったと言える。

メンタルヘルスの不調については、遠隔授業がある程度進んできたなかで、徐々にクローズアップされてきた問題である。学生は毎日自宅の自室等で一人PC等に向き合い、(教材提示型やオンデマンド型の場合は)一人で授業を受ける(教材を視聴する)。誰かと関わることも、時には一言も言葉を発することもなく一日が過ぎていく。新型コロナウイルスの脅威で、外を自由に散歩することも、課外活動に精を出すこともできない。特に、入学後一度もキャンパスを訪れることなく、このような状況を強いられた新入生においては、メンタルヘルスに不調が出てしまうのは当然のことである。

## キャンパスという空間、大学生活という時間の持つ意義

大学は教育だけの場所でも、知識習得だけの場所でもない。この表現には2つの意味がある。1つ目は、現在求

められている教育には知識習得以外の要素があるという点である。社会からの潜在的・顕在的ニーズやそれを踏まえた形で設定されたディプロマ・ポリシー(DP)では、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」等、多様な資質・能力の獲得が掲げられており、その実現のためのアクティブラーニングの推進もこの間図られてきたところである。緊急対応型遠隔授業の次に考えなければならないのは、遠隔授業の特性も生かしながらどのようにアクティブラーニングを推進し、DPの達成へと結びつけていくかであろう。

2つ目は、大学には教育以外に学生が学び成長する機会が多く含まれているという点である。日本の場合、学生の大半は18歳~22歳の年齢層であり、発達段階というと青年期後期に当たる。学校から社会へと移行し、また、子どもから大人へと移行する重要な時期である。この時期は、移行を遂げるために与えられた猶予期間(モラトリアム)であり、様々な物事に傾倒(コミットメント)する役割実験の期間でもある。その期間に、他者との親密な関係や親との適切な関係を築くこと、自身のア

※四捨五入の関係で合計が100%にならない場合もある。

アイデンティティや価値観を確立すること、社会に出るために必要な力を身につけ自立すること等の心理社会的な発達を遂げる。特に、予測困難な時代を生きるこれからの学生達にとっては、特定の限られた経験のみならず、多様な経験に身を投じ、十分な力を蓄える必要がある。そうした多様な経験には、自主的なゼミや研究会、部活やサークル、留学やインターンシップ、アルバイト、学内外でのボランティア、友人関係や恋愛関係、趣味等が含まれる。近年では、学生が学校の外で自主的に選択・傾倒する活動(正課外活動)以外に、学内の教職員が一定の戦略・意図を持って設計・運用する活動(準正課教育)も広がっており、学生の学びと成長に大きく寄与している。

学生達は、キャンパスという空間、大学生活という時間の中で、優先順位を付けながらこれらの活動に傾倒する。学生の学びや成長はこれらの相互作用によって遂げられる。一見関係なさそうな活動が学びへの意欲を加速させたり、試しに関わってみた活動で大きく成長したりと、非線形的で様々な要素が複雑に絡み合っている。学びは授業の中だけで完結するものではない。キャンパスという空間、大学生活という時間は、このように学生の学びと成長を最大化するために必要不可欠なものである。

### Student Successのための 学生エンゲージメント

学生の学びと成長の最大化(Student Success)のためには、上述した「空間」や「時間」の存在に加えて、「関与」(つながり・結びつき)が必要であると考えている。筆者は学生エンゲージメント(Student Engagement)という概念に着目し、これを「大学が提供する制度や環境、教職員が日常的に行う教育・指導等における深い関与、学生が自らの意志で選択し、学びに対して主体的に関与するというプロセスや一連の経験、そして大学、教職員、学生それぞれが担う関与の質と量の相互作用やダイナミクス」(山田, 2018a; 2018b)と定義している。ここで言う関

与には、認知的(アタマ)・行動的(カラダ)・情緒的(ココロ)の3領域が含まれている。

遠隔授業、とりわけ教材提示型やオンデマンド型では、知識習得という目的において一定の効果を発揮したが、多くの場合、教員と学生、学生同士の間での直接的な関与は生じない。この関与の有無、とりわけ情緒的な関与の欠如が、学生の学習意欲やメンタルヘルスに影響を及ぼしていると考えられる。単に豊富な知識や良質な教材を提供すれば良いというわけではない。知識や教材が、教員と学生、学生同士の関与を媒介することによってこそ、学習の継続性や精神の安定が保たれるのではないだろうか。今回のコロナ禍で、改めて対面授業の意義、教育における関与の重要性が見いだされた。

### 「関わりを止めない」「つながりを切らない」 学生支援を

新型コロナウイルスが大学や大学生にもたらした影響は計り知れない。キャンパスの閉鎖や全面オンラインでの実施等、過去に経験したことのない対応を余儀なくされたことによって、これまでの「当たり前」が相対化された。現在進められている「GIGAスクール構想」や高等教育におけるDX(デジタル・トランスフォーメーション)の推進等、遠隔やICTを基盤とした教育・学生支援が、今回のコロナ禍によってさらに加速するだろう。限られたリソースの中での画一的な支援ではなく、集積された学生の様々な学習成果や活動履歴がAIによって分析され、個々の学生の特性やニーズを踏まえた「個別最適な学生支援」といった形での展開も予想される。他方、雇用調整助成金等による家計補助や緊急経済支援による学費補助等もあり、現時点で学生の休退学者数は例年より減少していた。これは緊急的な対策によって何とか持ちこたえている状況で、この1~2年で状況が変わってくる(影響が遅れて出てくる)ことが予想される。また、若年の自殺者数(特に女性)が急増していることは看過できない問題である。新型コロナウイルス感染によるものではなく、メンタルヘルスの不調から来る自死の

ほうが多くなっている。今後さらに厳しい状況が訪れることも想定して、教育・学生支援双方を含む大学全体での取り組みが求められる。

以上のことを鑑みて、筆者は、ニューノーマルの時代に求められる教育・学生支援において、最も重要なキーワードは「関わりを止めない」「つながりを切らない」ことだと考える。教育面では、同時双方向型におけるアクティブラーニングや、教材提示型・オンデマンド型コンテンツを活用した反転学習の推進等が期待される。そのことによって、「個別最適な学び」と「協働的な学び」(中央教育審議会, 2020)の実現が可能となる。学生支援においては、より一層ピア・サポートの推進が期待される。今回のコロナ禍で、改めて情緒的なエンゲージメントの重要性が浮き彫りとなり、仲間同士での関わり合いやつながりを軸とするピア・サポートは効果的と言える。既に、新入生を対象としたオリエンテーションや学習支援等を、オンラインを活用したピア・サポートによって実施している大学もみられる。ほかの支援領域においても、オンラインという選択肢ができたことの意義は大きい。例えば、キャリア支援においては、都市部と地方との地域間格差の問題も解消できる可能性を秘めており、物理的に難しかった卒業生と在學生との交流等も容易になるだろう。国を越える留学や留学生支援においても、身体性を伴う

体験に勝るものではないが、オンラインの活用によってより容易に異文化交流が可能となる。留学を必修に掲げる大学も増え、それを望んで入学してきた学生達は、休学や退学という選択肢を取りかねず、緊急性の高い課題の1つである。障害学生支援においても、物理的に通学が困難な学生や精神的な理由で不登校の学生、直接面と向かって話すことが難しい学生達にとって、オンラインを活用した面談は有効な方法になりえる。

ただし、こうした取り組みを行うためには、従来の教職員スタッフだけでは困難である。上述したピア・サポートの活用や、コーディネーターやアドバイザー等新たな専門スタッフの創出・雇用、円滑な業務を可能にするための情報基盤(プラットフォーム)の強化等、これまで以上に需要が高まる学生支援を組織的に支える大学の戦略と対応が必要不可欠となる。教育にせよ、学生支援にせよ、情報発信(教材提示・動画配信)等一方向的な伝達に終わらせず、対面に比べて交換・感受できる情報に限りがあるオンラインであったとしても、双方向的なコミュニケーション(関わりやつながり)を確保することが極めて重要である。他者との関わりやつながりによって、学生は学び成長し続けることができるのである。オンラインという新たな道具を得たとしても、そのことは変わらず大学の価値になると信じている。

[▶カレッジマネジメントTOPページへ戻る](#)

